

児童主体で行う文学教材の授業について

～学級内ジグソー学習～

尾道市立因北小学校 松岡葉月

1 実践の趣旨

今回の教材「ごんぎつね」は、新学習指導要領における国語科第3学年及び第4学年のC読むこと」の目標「(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。」をねらいとしている。特に重点を置く指導項目としては、「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」を挙げることができる。

単元構成として、人物の気持ちのうつりかわりを主体的に読ませるために、主な登場人物である「ごん」と「兵十」の視点別コースをクラス内に作り、読んでいく。お互いのコースに質問し、その課題をコース内で解決しながら読みを深めていく。視点別コースで考えたことをジグソーグループにかえり、対話を持って交流し、二人の関係をキーフレーズで表していく。

本教材は、主人公「ごん」の善意の行為が、結果として相手を傷つけてしまったり、兵十が火なわじゅうで撃ってしまったあとに、ごんの本意に気づいてしまったりするというように、人間の心の交流について、読み手が様々に考えるような深い内容をテーマにした文章を読むことが中心になる。登場人物がどのようなことを起こしたか、またその出来事に対してどんな気持ちになったかという気持ちの変化を想像し、それぞれの登場人物の生き方について考えさせることがねらいである。その場合、文章から離れて勝手に想像するのではなく、叙述に即して理解させるようにしたい。

本単元の学習形態として学級内ジグソー学習を取り入れる。主人公「ごん」に同化体験をして読んだ後、主な登場人物である「ごん」と「兵十」の視点で読み、コース別で学んだことを他コースで学んだ児童に対話によって伝え合う。このようなジグソー学習を行うことで、自分のコースでは読み深められなかった、気づかなかった読みを発見し、読み深めることができると考える。

今回は、学級内ジグソー学習を行うにあたり、学習リーダーを設定した。各コースやジグソークラス、そして全体対話の場面で学習リーダーが授業を進める児童主導の形態を初めて用いる。学習リーダーは授業の流れ、司会の仕方などを教師から教わることで、自分たちで授業を進めるという力をつけるねらいがある。今回は初めてなので、その児童主導で行う授業の仕方を経験することを重点課題としている。今後、高学年では、自分たちで授業のめあてや課題を見つけ、授業を自分たちで進める力をつけさせることが「生きる力」である「課題解決能力」をつけるための手立てになると考える。

ジグソー学習では、視点別コースごとに「ごん」や「兵十」の気持ちについて読み取ったことや学び合ったことを出させていく。その後、他コースの児童と対話によって考えを交流し、二人の関係をキーフレーズで表す。全体対話の中で模造紙に貼っていきながら二人の気持ちについて深く読み取らせていきたい。

2 実践の概要

(1) 単元名 人物の気持ちのうつりかわりを考えよう 教材「ごんぎつね」

(東京書籍 4年下)

(2) 単元の目標

- 登場人物の心情の変化について読みとることができる。
- 表現にいかせる言葉を登場人物の心情や場面についての描写から読みとり、文章に書くことができる。

(3) 手だて

①活動目標の設定とジグソー学習形態の活用

活動目標として、「ごんぎつねの木・気・記をつくろう」という活動目標を設定し、本文で読み取ったことをもとに、各場面を表すキーフレーズを考えさせてまとめていった。

指導にあたっては、初めに「再話」を使って登場人物や大まかな場面の移り変わりを捉えさせ、あらすじをつかませていった。次に「物語の構造分析」で物語の山場（クライマックス）を捉えさせていった。その後、児童が心に残ったことと構造分析のクライマックス部分の共通点について焦点をあて、中心課題を考えさせていった。そして中心課題を解決するために、学級内ジグソー学習を行った。

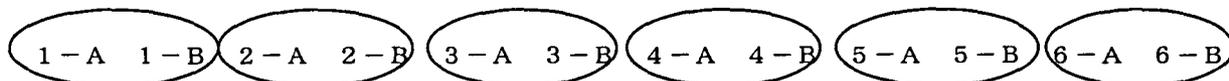
今回は、学級内ジグソー学習を行うにあたり、学習リーダーを設定した。各コースやジグソークラス、そして全体対話の場面で学習リーダーが授業を進める児童主導の形態を初めて用いた。学習リーダーは授業の流れ、司会の仕方などを教師から教わることで、自分たちで授業を進めるという力をつけるねらいがある。今回は初めてなので、その児童主導で行う授業の仕方を経験することを重点課題とした。今後、高学年では、自分たちで授業のめあてや課題を見つけ、授業を自分たちで進める力をつけさせることが「生きる力」である「課題解決能力」をつけるための手立てになると考えたからである。

ジグソー学習では、視点別コースごとに「ごん」や「兵十」の気持ちについて読み取ったことや学び合ったことを出させていった。その後、他コースの児童と対話によって考えを交流し、二人の関係をキーフレーズで表し、全体対話の中で模造紙に貼っていきながら二人の気持ちについて深く読み取らせていった。

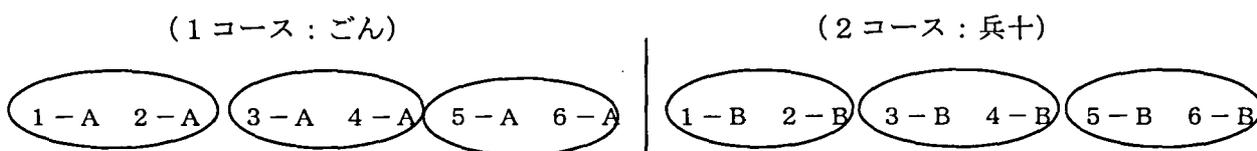
【学級内ジグソー学習の流れ】



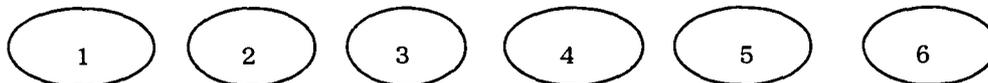
【各グループが2つのコースに分かれる】



【各コース別学習を行う】



【元の1 2 3 4 5 6グループに戻っての対話】



②進行表シートの活用と質問状

今回は児童が授業を進めていくので、そのための進行表シートを作って、児童に一時間の流れをつかませた。それから、児童が本文を読んで気づいた疑問について解決していく「質問状」を教師とやりとりしておき、授業で話し合う中心課題を見つけさせたり、各場面のごんや兵十のきもちの読み取りを深める作業を行って、各場面の読み取りを進めていった。

③「賛成か反対か話し合おう！問答ゲーム」の活用

読み取りにおいては、全体対話の児童の発言がキーポイントになってくる。この「発言力」をどうつけていくか。それは、本校が取り組んでいる言語技術「問答の技術」を使うことにした。そこで、楽しんでできる「賛成か反対か話し合おう！問答ゲーム」を取り入れた。このゲームは賛成派と反対派に分かれて、自分たちの主張をするだけでなく、相手の意見に質問したり、反対意見を言ったりするとポイントがつくゲームにした。もちろんこのポイントが多い方が勝ちである。このゲームを行うことで、自分の意見を言ったり、相手の意見をきちんと聞いたり、そして考えたりするということができるようになった。こうして児童の発言力を高めておくことで、本時の全体対話につなげていった。

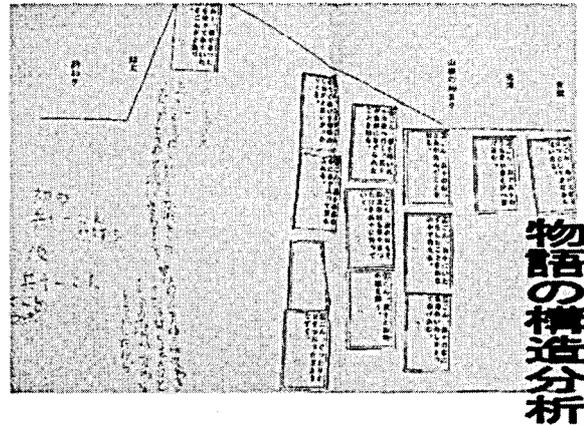
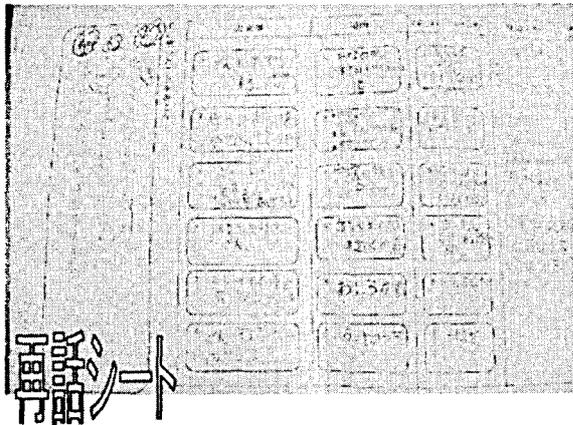
(4) 指導計画 (全8時間)

次 (時 間)	学習活動	文学体 験	言語技 術	評価		
				観 点	評価規 準	方 法
一 次 (2)	①「ごんぎつね」の全文を読み、再話シートで物語のあらすじをつかみ、初発の感想を書く。	同化	再話	読	物語の大まかなあらすじをつかんでいる。	ワークシート① (再話シート)
	②「ごんぎつね」について物語の構造分析をする。	対象化	構造分析	読	物語の構造分析をし、物語のクライマックスをとらえている。	ワークシート② (構造分析シート)
二 次 (5)	③再話、物語の構造分析で学んだことから中心課題を設定する。	対象化	問答	読	再話シートの心に残ったことと構造分析のクライマックスとの共通点を見つけ、中心課題について考えている。	ワークシート③
	④1場面を読み、ごんと兵十の出会いと出来事の起こりをとらえる。 (ごん、兵十コース)→(1, 2, 3, 4, 5, 6コース)	対象化	問答 視点	読	叙述をもとに、人物の気持ちや場面の様子を読み取っている。	ワークシート④
	⑤2・3場面を読み、ごんが兵十に償っていく気持ちによりそって考える。 (ごん、兵十コース)→(1, 2, 3, 4, 5, 6コース)	対象化	問答 視点	読	叙述を基に、人物の気持ちや場面の様子を読み取っている。	ワークシート⑤

	⑥ 4・5場面を読み、ごんと兵十の気持ちのすれ違いについて考える。 (ごん、兵十コース) → (1, 2, 3, 4, 5, 6コース)	対象化	問答 視点	読	叙述を基に、人物の気持ちや場面の様子を読み取っている。	ワークシート⑥
	⑦ 6場面を読み、ごんの死と兵十とごんの心の通い合いについて考える。 (ごん、兵十コース) → (1, 2, 3, 4, 5, 6コース) 本時 (7/8)	対象化	問答 視点	読	叙述を基に、人物の気持ちや場面の様子を読み取っている。	ワークシート⑦
三次 (1)	⑧ 学習後の全体交流会をする。	対象化	問答	読	友達の意見を聞き、自分の意見との同じ所や違いについて気づく。	発表 観察 感想文

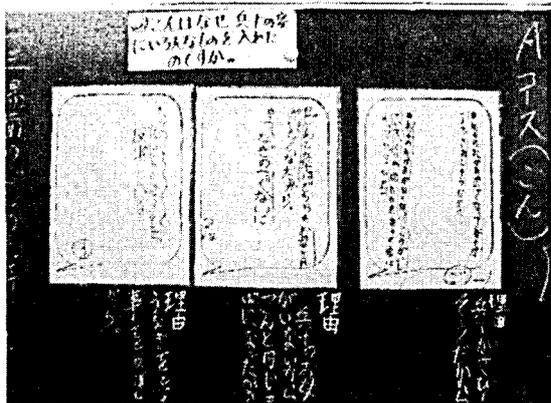
(5) 授業の様子

再話では、「ごんぎつね」の全文を読み、大まかなあらすじを捉えていった。

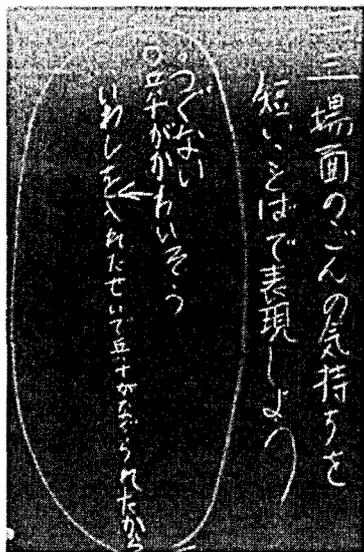


その後、物語の構造分析では、クライマックス部分をつかませていった。児童は、クライマックスの定義である「主人公の気持ちに変化したところ」という点をおさえて自分なりに考えていた。ここで、お互いの意見をたたかわせ合うことが、児童にとっては読み取りを深める第一歩になったようだ。また、たたかわせる楽しみも感じた。

教室に移動黒板を2つ用意し、「ごん」コースと「兵十」コースに分かれて、本文の読み取りを行った。児童は、それぞれのコースに出された質問の答えを考えることで本文の読み取りをおこなっていった。その後、各コースで司会者がそれぞれのコースの読み取りについてみんなから意見を出させていった。子どもたちは自分の意見に自信を持って発言していた。また、反対意見が出たときには、根拠となる部分を提示し、自分の意見に説得力を持たせていた。

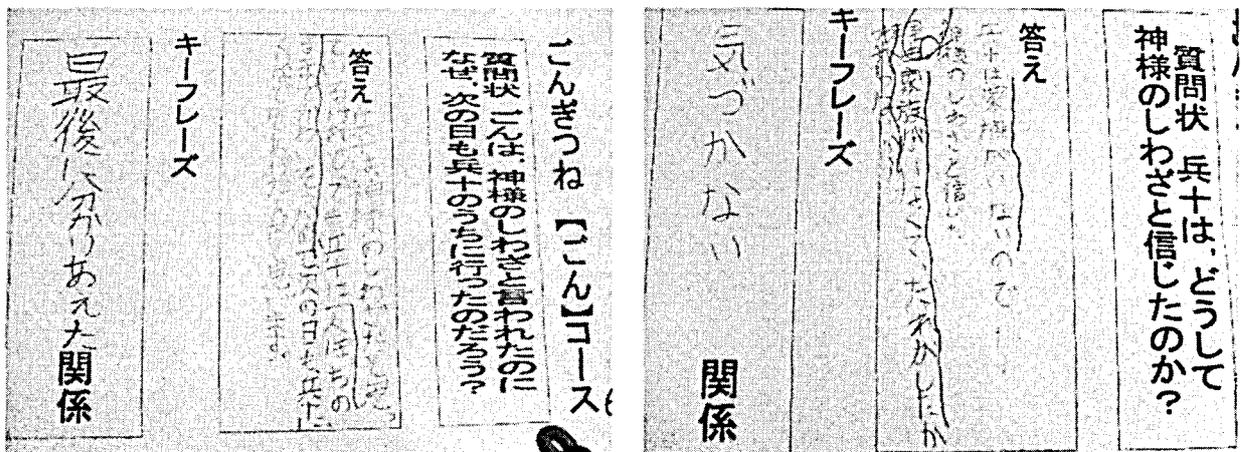


各グループで話し合ったことをホワイトボードに書いて、黒板に張り付けた後、コース内で話し合いを行った。黒板に書くのも、進めるのも児童だけで行った。



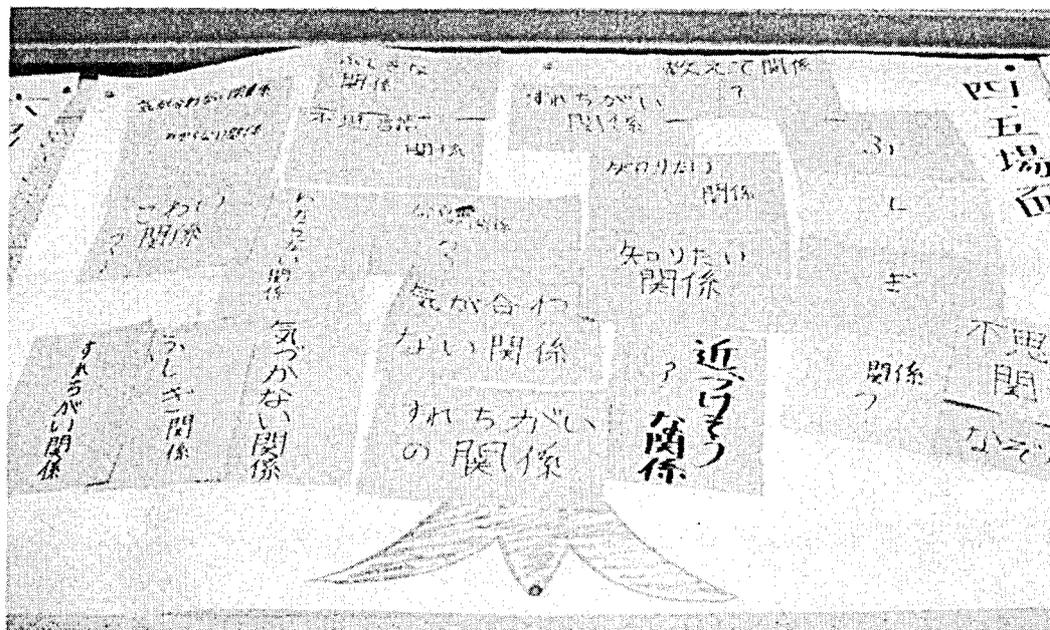
話し合った後、コースごとにごんや兵十の気持ちを短い言葉で表した。この話し合いが後の、キーフレーズ作りにつながっていった。

コース別の学習が終わると、学んだことを交流するグループになった。これは、「ごん」コースから2名、「兵十」コースから2名からなるグループ編成になっている。お互いのコースで読み取ったことを交流し、この場面のキーフレーズを考える。キーフレーズは、ごんと兵十の関係をあらわしたものとした。児童は、喜（桃）怒（黄）哀（水色）楽（緑）のカードを選び、キーフレーズを書いていた。児童にとって、この作業はとても楽しいようで、自分の考えたキーフレーズを一生懸命書いていた。



質問状シート

ここから、全体対話となる。全体対話では、司会の児童がキーフレーズについての質問をするように児童全員に声をかけた。児童は、質問したくてたまらない様子だった。それは、キーフレーズだけでは、ごとと兵十の関係がくわしくわかりきらないからである。そして質問された児童は自分のキーフレーズについて、理由と根拠を述べていった。お互いの書いたキーフレーズに対して質問や意見を出し合うことで、ごとと兵十の関係を考え、文章を深く読み取っていくことができた。



「ごとの兵十(キーフレーズ)」

3 成果と課題

成果

- 児童が自分たちで進めたことで、今回の授業の達成感を感じていた。アンケートでは、24人中22人がまた、学級内ジグソー学習をしたいと答えていた。
- 学習リーダーになることに苦手意識を持っていた児童が、リーダーが先生のように前に立って、黒板に意見を書いたり、意見をまとめたりすることに魅力を感じ、次回はリーダーをしたいという児童がでてきた。
- 進行表を児童に渡しておくことで、児童も教師も見通しを持って授業に臨むことができた。
- 読み取りに入る前に、質問状のやりとりを教師と児童の1対1でしたことで、一人一人の読みの違いや深まりを細かく見てとることができた。

課題

- コース別の授業では、2コースの動向を教師がいつべんにみることができないので、読みの深まりを求めるための繰り返し発問のタイミングを計るのが難しい。
- 教師自身の教材解釈だけでなく、児童につかませたい読みを持っておくことが必要である。
- 喜怒哀楽だけでは書けない思いが出てくる場合も考え、喜怒哀楽の定義を児童と考えた上で、カードを書かせると、もっと読みの深まった思考がでてきたのではないか。
- 教師の介入場面を少なくし、児童主体の授業にしていくなれば、教師は、教室の真ん中に立ってしっかり児童の様子を観察し、メモしながら、繰り返し発問を考える必要がある。